

(五)	た	収	け	困	掛	(四)	(三)	(二)	(一)
a	そ	こ	で	ら	窮				
暖	こ	と	き	れ	に				
日未	に	へ	な	た	応				
b	互	返	て	い	て				
慣	扶	礼	も	う	ツ				
c	助	が		感	ケ				
拘	の	得	支	覚	を				
泥	の	気	ら	私	を				
	風	れ	い	抱	定				
	が	れ	の	く	す				
	醸	ば	猶	こ	る				
	成	よ	予	と	際				
	さ	い	を	で	に				
	れ	と	相		助				
	る	納	手	代	け				
	こ	得	に	金	た				
	と	で	与	が	・				
	き	え	回	助	る				

(四)	(三)	(二)	(一)
	未払いによる高取引上の不均衡があっても、相手に配慮を示されたら返礼し、困窮しているときには助け合うことで人々の生は営まれているということ。	は客に任されているという了解が売り手と買い手の間で共有されているから。	後払いの客認が、余剰の現金を欠く者も得意客として確保し、販売数を稼ぐことでは入れ時の優遇を図り、緊急時の備えになまるといった利得を生むから。

第二問

(五)	(四)	(三)	(二)	(一)		
この喪服は先帝を偲ぶ形見だと思ふと、その袖が絶えず涙に濡れるという事。	作者は先帝を慕ってばかりで新帝に熱心にはえていないように見えるから。	自分が出家するのに適当な機会を見つけれないかという事。	作者がお召しを待っていたかのように再出仕するのは嘆かわしいという事。	オ	ウ	ア
				オこのようにして自分の心がもとで弱ってゆけばよいよ	ウ慕わしく思い申し上げるけれど	ア長年、宮仕えをしていらつしやるお心がけの立派ヤ

第三問

(四)	(三)	(二)	(一)		
価値のない書物を著していること。 近年の著作者たちは、自分の意見を述べることなく、剽窃して	季節や時間の流れのように、誰もが疑いなく受け入れられる形だった。	展開するのだということ。 どうしても述べずにいられないことがあればこそ、書物を著し自説を	e	d	b
			内容はかたよりがあるが	丘や山のように大きな利益	その時だけの満足を求めること

第四問

(四)	(三)	(二)	(一)
経験ではないが、自分をまるごと受け入れることに通じ、心の平安をもたらすから。	外国語を通して、抑圧された自己の欠点や未熟さに向き合うことは、暗れやかな意識下に隠されていた醜悪なもの、知らずも言語化されてしまうということ。	よそよそしい外国語を用いるからこそ、自分が抱えていた様々な悩みにつながら、いたように、外国語の習得により新たな視点や感覚が得られるということ。	外国語で文学作品を読み表現する際に生じる違和感、外国語に習熟するにつれ減少するが、母語で書かれた文学に接する時のより自然には達しえないということ。 「第二言語」という語を知ったことで、ただの空き地が木漏れ日のまばゆさと結びつ